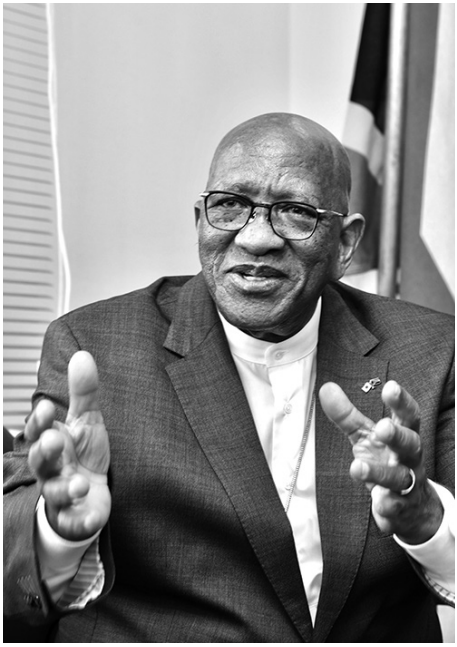


駐日大使は語る⑧

駐日南アフリカ共和国大使 ルラマ・スマッツ・ンゴニャマ

駐日大使は、各国の正式代表として日本に常駐する唯一の存在。大使の目に、日本外交はどう映るのか。アフリカ唯一のG20メンバー南アフリカのンゴニャマ大使に聞く。

Lulama Smuts Ngonyama
1952年生まれ。1998～2008年に大統領府およびアフリカ民族会議（ANC）主席報道官、09～14年に国会議員、14～19年に駐スペイン大使などを歴任し、19年6月より現職。

アフリカ全体の開発を牽引 日本・南アフリカ関係のダイナミズム

【インタビュー・構成】小南有紀

――南アフリカは人種や民族の多様性から、「虹の国」とも呼ばれているそうですね。

大使　南アフリカでは多様性が尊重されており、例えば一一の公用語が使われています。現在の我が国を語るには、アパルトヘイトという暗い過去に触れなければなりません。この政策の下で、黒人たちは長年にわたって抑圧されていました。しかし、ネルソン・マンデラ氏の指導力によって、一九九四年に南アフリカ初の民主的選挙が行われてからは、民主主義を貫いています。南アフリカは自由や平等、多様性を大切にする国になったのです。

国内には八つの世界遺産をはじめ、数多くの魅力的な観光地があります。「ウブトゥ（Ubutu）」（ズールー語で「あなたがいるから私がいる」の意味）という言葉があるように、南アフリカの国民は他者への思いやりを大切にしています。観光客の方々には、都市の散策から大自然での冒険まで、必ずや旅を満喫していただけるでしょう。

――二〇一九年に駐日大使就任が決まった時の心境はいかがでしたか。

大使　とてもわくわくしたのを覚えています。それまで日本を訪れたことはなかったのですが、日本人研究者の本をたくさん読んでいました。これらの本から、戦後日本の発展の秘訣を学びました。駐日大使になってからも多くの研究者の方々にお会いし、経済や文化、防災などさまざまな分野について教えていただきました。

両国の間では学術交流が活発で、例えば日本・南アフリカ大学（ＳＡＪＵ）フォーラムが〇七年から現在までに五回開催されています。アフリカ開発会議（ＴＩＣＡＤ）の枠組みで実施されている「アフリカの若者のための産業人材育成イニシアティブ（ＡＢＥイニシアティブ）」でも、多くの南アフリカの若者が日本に来て学んでいます。

私自身も日本各地を訪れて、この国の魅力に触れています。例えば、京都では日本の伝統を、大阪・神戸では経済のダイナミズムを実感しました。一九年のラグビーＷ杯では、南アフリカ代表チームが、キャンプ地の鹿児島で大歓迎を受けたのが印象的でした。広島・長崎では原爆投下について、当時を経験した方々からお話を伺いました。一九九一年に核兵器を放棄した我が国は、広島・長崎が経験した悲劇を二度とくり返してはならないと信じています。

私は日本食も大好きで、中でもみそ汁がお気に入りです。南アフリカから連れてきた公邸料理人に、日本食を勉強してもらったほどです。駐日大使の任期中に、もっともっと日本を知りたいですね。

日本も中国も、不可欠なパートナー

――南アフリカはアフリカ唯一のＧ20のメンバーです。

大使　Ｇ20は先進国と途上国が参加する貴重な議論の場です。我が国は、Ｇ20が持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）に基づいて、アフリカ全体の開発に取り組む必要性を強調しています。二〇二五年には我が国が議長国を務めることになっており、アフリカを含むグローバル・サウスの発展を牽引していきます。

G20に加えて、我が国は国連の枠組みも重視しています。世界のさまざまな課題の解決に向けて、国連がさらなるリーダーシップを発揮すべきです。そのためには、国際社会の実情を踏まえた国連安保理改革が欠かせません。この点で、我が国と日本は認識を共有しており、国連安保理非常任理事国としての日本の役割に期待しています。

――ロシアによるウクライナ侵攻から一年が経った今年二月、南アフリカ・ロシア・中国の海軍による合同軍事演習が実施されました。

大使　南アフリカは、ロシアによるウクライナへの軍事介入を容認しているわけではなく、国際法は遵守されなければならないという立場です。今回の紛争で、多くの死者や人道被害が出ていることを強く懸念しています。戦いを続ける必要はありません。我が国は一貫して、交渉による解決を呼びかけています。

ロシア・中国の海軍との軍事演習は、二〇一九年に続いて二回目です。その目的は海賊対策や災害対応を含めた連携を強化することにあります。ここで強調しておきたいのは、南アフリカの外交政策は「非同盟」を原則にしているということです。我が国はあらゆる国との協力を望んでおり、実際に、二二年には米軍とも合同演習を行っています。

――南アフリカは、中国との関係も緊密化させていますね。

大使　我が国にとって中国は重要な戦略的パートナーであり、二国間だけでなく、多国間の枠組みでも緊密に協力しています。経済的には、中国は最大の貿易相手国であり、インフラ開発の面でも協力してくれています。

日本において、地政学的な観点から中国への懸念の声があることは、私も承知しています。しかし、南アフリカにとって、日本と中国はどちらも不可欠なパートナーなのです。日本もＴＩＣＡＤや国際協力機構（ＪＩＣＡ）などを通じて、アフリカのインフラ開発、保健・医療、防災・減災、女性のエンパワーメントなど幅広い分野で協力してくれています。

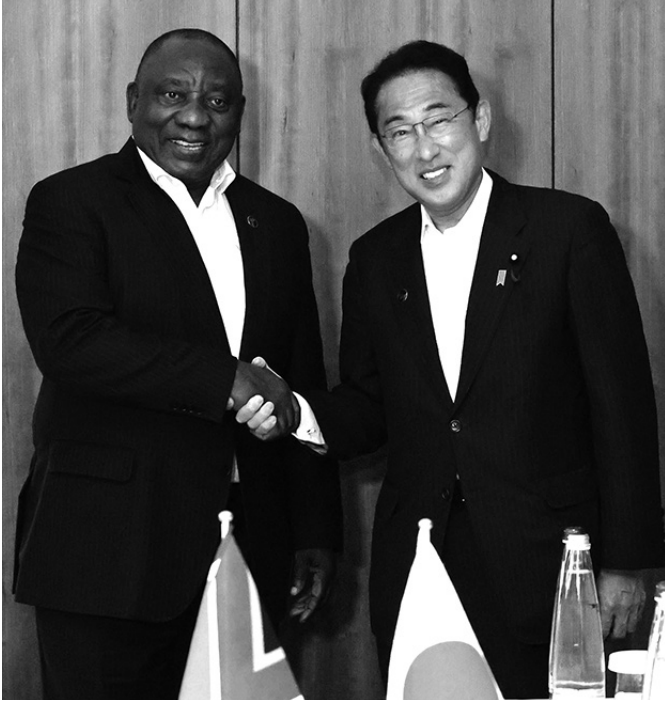
ビジネスに目を向ければ、南アフリカだけでも二六八社の日系企業が進出しており、二〇万人以上の雇用を創出しています。駐日大使館としても、両国のビジネスをさらに後押ししていきます。

G7に期待すること

――G7との連携はいかがですか。

大使　アフリカ諸国とG7諸国は、これまでさまざまな分

野で緊密に協力してきました。これからも、さまざまな協力の機会があると信じています。例えば気候問題に関して、先進国では「脱石炭」が推進されていますが、我が国を含むアフリカ諸国の人々の生活は、石炭なしには成り立たないのが現状です。G7には排他的な枠組みになるのではなく、すべての国のさらなる幸福に向けて今後も努力してくれることを期待します。広島で開催されるG7サミットでは、アフリカ大陸を代表して、アフリカ連合（AU）の議長国であるコモロが参加します。



G7エルマウ・サミット開催期間中の2022年6月27日に行われた日・南ア首脳会談（提供・内閣広報室）

――最後に、今後の日本・南アフリカ関係の展望をお聞かせください。

大使　両国の関係は、ますます強固なものになっています。例えば、二〇二二年六月のラマポーザ大統領と岸田文雄首相の会談や、一〇月の「日・南アフリカ・パートナーシップフォーラム」の場で、政治・経済・外交などのあらゆる面での協力を深めることで一致しました。

国民同士の交流も活発です。南アフリカ代表が優勝した一九年のラグビーW杯は、日本でラグビー人気が高まるきっかけとなりました。ラグビーを通して、国民レベルの相互理解が深まっているといっても過言ではありません。駐日大使館としても、大学での講義や文化イベントなどを積極的に行い、国民同士の友好を育んでいきます。

私は、南アフリカと日本の関係が、さらに強固なものになっていくと確信しています。両国の協力の地平は拡大しており、明るい将来がとても楽しみです。●